

だんやまこようあとぐん
壇山古窯跡群発掘調査説明資料

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター 平成28年6月18日(土) 14時

調査要項	
遺跡名(番号)	壇山古窯跡群
所在地	山形県東置賜郡川西町大字時田
時代・種別	奈良・平安時代の窯跡
起因事業	町道虚空蔵山西線道路改良工事
調査依頼者	川西町地域整備課
調査機関	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
現地調査	平成28年5月9日から6月30日まで
調査面積	400㎡
調査担当者	主任調査研究員 天本昌希(現場責任者) 調査員 三浦一樹
検出遺構	須恵器窯、竪穴建物、溝状遺構
出土遺物	須恵器坏・甕



図1 遺跡位置図(1/25,000)

①壇山古窯跡群、②大神窯跡、③西方窯跡

1 調査の概要

壇山古窯跡群は、川西町大字時田のJR米坂線中郡駅のすぐ近く、虚空蔵山のすそに立地します。(図1)。本遺跡は、1966年に山形大学により調査され、奈良・平安時代の須恵器の窯跡が発見されました。須恵器は、ねずみ色の素焼きのやきもので、食器や貯蔵甕などに用いられたものです。山形大学の調査により遺跡内には、複数の須恵器窯が展開していたと考えられています(図2)。さらに、隣接する米沢市の大神窯跡などからも同時代の須恵器窯が発見されており、周辺の丘陵一帯は、奈良・平安時代の置賜地区の生産拠点になっていたことがうかがえます。

今回の発掘調査は、町道虚空蔵山西線道路改良工事に係わり実施されました。5月9日から調査を進め、400㎡の調査区から、現在のところ、2基の明確な須恵器窯のほか、カマドのない方形の竪穴建物や須恵器を大量に含む溝状遺構などが発見されています。

2 遺構と遺物

今回、発見された須恵器窯は、すべて南向きの斜面につくられ、のこりの良いもので、およそ長さ8.5m、幅1.8mあります。ここから出土した須恵器の形状から、いまからおよそ1200年前の奈良時代の終わりから平安時代の始め(8世紀末~9世紀初頭)のものと考えられます。

窯跡は、丘陵斜面を傾斜に沿って掘りくぼめ、その上に人工的につくった天井をかけるという半地下式のものです。S Q 4窯跡からは、崩落した天井材が大量に出土しています(写真3)。これをみると、スサや小石を混ぜた粘土でつくられていることがわかります。また、S Q 5窯跡からは、天井や壁だけでなく、床にも粘土を貼付けてつくっている様子がみてとれます(写真6)。

窯以外の遺構では、S T 2建物跡は、かく乱で多くを壊されていますが、一辺4mほどの建物跡と考えられ、須恵器作りに伴う現

地工房なのかもしれません。床面から炭化材がたくさん発見されており、火事で焼け落ちた可能性が考えられます。S D 8は現在のところ性格のよくわからない溝状の遺構ですが、最深部で80cmを測り、大量の遺物が捨てられています(写真8)。

3 まとめ

奈良・平安時代の東北地方は、開拓が盛んに進められた時代です。本遺跡のような窯跡は、新規開拓のために増加した生活品の需要に対応するためにつくられたものと考えられます。須恵器は食器などの日用品から宗教的なものまで、当時の生活や文化を考える上で重要な資料となるものです。

また、奈良・平安時代のほとんどの遺跡で須恵器は出土します。この須恵器の種類や形の変化は、その遺跡の時期を判断する重要な材料となります。須恵器がどこで、いつ頃作

られたかを明らかにできる窯跡の調査は、周辺の遺跡の年代を判断する基準となります。

更に、須恵器をつくる高度な技術は、独自に生み出されたものではなく、他地域から導入されたものと考えられます。本遺跡での半地下式の須恵器窯の作り方は、北陸から東北の日本海側に多く見られるものと共通することから、地域間の交流をうかがわせます。

このような高度な技術を管理し、須恵器を供給していたのは、当時の権力者層と考えられます。本遺跡の周辺には、大浦B遺跡(米沢)や道伝遺跡、太夫小屋1遺跡(川西)など、当時の役所跡やそれに類するものと考えられる遺跡がいくつか確認されており、関係性が注目されることです。

このように須恵器窯跡の調査は、多くの情報を提供してくれます。これからの調査と整理作業の進展によって、置賜の歴史を物語る重要な資料が得られることが期待されます。

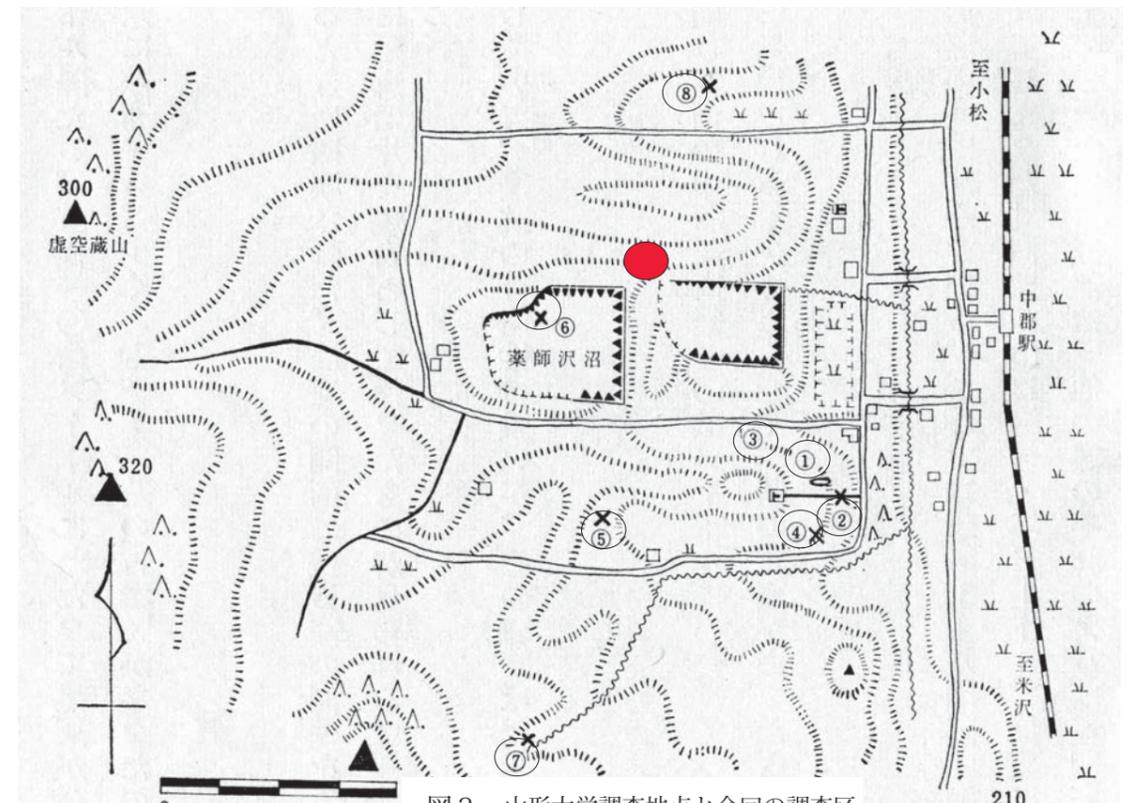


図2 山形大学調査地点と今回の調査区

